



ŌYABU HOT-NOVEL SERIES

汚れた英雄

大藪春彦 ★★★★★



ŌYABU HOT-NOVEL SERIES

汚れた英雄 〈第四巻・完結篇〉

大藪春彦 ★★★★★



徳間書店・大藪春彦活劇選集④②

原
书
空
白

原
书
空
白

イヴェートなことに、^{くちばし}嘴を突っこまないでもらいたいですね」

晶夫の笑いには凄味があつた。

「頭のぼせるな。あの女性は、元イタリー皇太子妃だ」

「ちよつと、ここから出ませんか？」

「ああ。頭を冷やせ。付いて行つてやる」

パガーニは言つた。

「^ミは優雅な身ぶりで人波をかきわけながら大宴会室を抜けた。そのあとにレーシング・マネージャーが続く。

官邸の裏手には、ハンの木の林があつた。無言の林のなかに入つていく晶夫に、パガーニが、どこに行く？」

不安になつてきたらしい声を掛けた。

へは立ちどまつた。パガーニに向けて振り返る。そこに残忍な笑いが浮かび、眉のあたりから殺氣にも似たものがゆらめいた。

か、頭のぼせるな、などと言われて、その雑言を頭を垂れて拝聴すると思つてたのか？」

「ま、待て！」

ネロは両手を肩の高さにあげて、あとじさろうとした。晶夫は左手をのぼしてネロの襟を掴むと見せかけ、深く右足を踏みこむと、バック・ハンドの手刀をネロの口に叩きつけた。

え
れた前歯を吐き散らしながらをぶつつけて崩れ折れる。

一
みる。今度は喉仏^{のどぼとけ}を叩き潰しにしてやる。いくらMVのレも、俺にプライヴェートなこな」

なかった。

トマト・ケチャップをぶつか

けたようになっていた。
「やめろ。やめてくれ！ クビになつてもいいのか？」
「契約はレースのときだけに通用する。プライヴェートは別だ。俺をクビにはできない。それに、俺をクビにしたらMVにとって大損失だ」

晶夫は言った。

「聞いてくれ——」

ネロは哀れっぽい声で言った。

「あの女性は、もとイタリア皇太子妃だ」

「さっきも聞いたよ。それに、リヒテン、インの王女だってことも知っている。それが、どうしたって言うんだ？ 俺は次のダッチT Tレースに行く飛行機に乗り遅れなかったらいいんだろう？」

「君はイタリアの歴史を知らない。イタリア王室はサヴォイ家だが、四六年に、国王エマヌエル三世が退位し、ウンベルト二世——つまりイラの夫であつたヴィクトール之父——が王位を継ぐと、そのあとわずか三十五日後には、国民投票でイタリアは共和制になった。エマヌエル三世はポルトガルに亡命し、王と不仲だった王妃はスウイスに去った。

だから、王と言つても、本当は旧王だ。しかし、イタリアには、王制復古をもくろんでいる王党派の組織がある。彼等にとっては、いくらイラが皇太子と離婚したとは言つても、派手な浮名を流されたんでは、王室の尊厳

が傷つけられたということでアタマにくるわけだ。

はつきり言つて、王党派は再び王制が復興されることによって、自分たちが再び甘い汁を吸えることを熱望している。だが、王家の人間や、王家に關係がある者がただの人間にすぎないんだということがあからさまになつたんでは、王家の神秘性がなくなつてしまつて、王制復古はますます望み薄になる。

特に行動的なのは、青年王党派連盟という極右団体だ。これまで、イラにたびたび脅迫状を送っているし、イラと離婚したヴィクトール皇太子が、ジュネーヴの時計屋の娘とねんごろになつたときや、ヴィクトールの姉が平民の実業家に熱をあげたときには、王家の名を汚す許しがたいスキャンダルであり、我々を侮辱する行為でもある。この警告に対して、反省の意思がないときには、我々は何らかの直接行動を実行する用意がある」という抗議文を送っている」

ネロはしゃべつた。

「なるほど……分りました。ただどね、マネージャー、MVは僕を日本の旧貴族に仕立てる方針じゃなかったん



ですか？ 僕が旧貴族だということになれば、王党派も文句ない筈だ。MVの宣伝部は何をしてるんです？」

晶夫はニヤリと笑った。ネロを立たせてやる。ネロはハンカチで血をぬぐった。

表に廻ると、MVのメカニックたちが乗ったマイクロ・バスが、ホテルに帰ろうと、エンジンをつけているところであった。野暮なウツピアリや付き人がわりの兄マウリチオもその車に乗っている。そのうしろでは、父親のジャックが運転する別のマイクロ・バスで、ジョン・サーティズがもぐりこんできた少年ファンのサイン攻めにあっていた。

サーティズも当時は、かつてライダーであった父が個人マネージャーを勤めていた。前年から四輪レースに進出しはじめ、この年六〇年も、すでに一・五リッター・フォーミュラⅡやフォーミュラ・ジュニアで二、三度戦った。(その年のF1は二・五リッターの最後の時代で、翌六一年からは一・五リッターがF1になる)サーティズは、七月十六日にはリア・エンジンのロータス・クライマックスF1で四輪イギリスGPに出場する。

したがって、日常使うスポーツ・カーもかなり高級で、ポルシェ、アストン・マーチン、メルツエデス・ベント三〇〇SLなどを経て、当時はMVからボナスとしてもらった特製二百馬力、最高速二百三十八キロのB・M・W五〇七を使っていた。

ネロの血まみれのシャツと腫れあがった唇を見て、メカニックの一人のウンベルトが血相を変えてマイクロ・バスから飛び降りた。晶夫は、

「歯医者にセニョール・パガーニをお送りしてくれ。木の根につまづいて怪我された」と、言う。

マン島には自分のフェラーリを持ってきてなかったの
で、晶夫は個人出場のノートンの選手に金を払って、その男のオースチンで、クレイ・ヘッド・ホテルに送ってもらった。途中で、フリージアの花を一抱えほど買いこむ。クレイ・ヘッドはダグラスの町からラムゼイの町に向けて、オンカン・ヘッドの先にある。イラが泊っているホテルは、白堊の断崖の上にあった。三階建ての古めか

しいホテルだ。

ロビーはレースの興奮の余燼が冷めやらぬ人々にぎわっていた。晶夫はサン・グラスで顔を隠し、旧式なエレヴェーターに乗りこんだ。一ポンドのチップを払っただけで、エレヴェーター・ボーイは余計な質問をしなかった。

重力式の旧式エレヴェーターは、ゆっくりと昇っていた。晶夫は、リヒテンシュタインという国について考える。

スウィスとオーストリアには含まれたリヒテンシュタイン公国は、面積は小豆島ぐらいしかなく、人口はわずかに一万六千人だ。住民はドイツ系だし、王家もゲルマン系のうちの最後の生残りだが、イラの顔にどこか東洋の血の面影があるのは、すでに東洋人であるマジヤール人の国であったところに、十三世紀にモンゴールの侵入を受け、さらに十七世紀末に隣国のオーストリアのハプスブルグ家の支配を受けるまでトルコの領土であったハンガリーの血が、先祖に混っているのかも知れない。

現在、リヒテンシュタインは永世中立国で、軍隊は無

い。軍事や外交や財政はスウィスに代行してもらっており、小型精密機械や世界中のコレクター向けの記念切手、それに国籍——脱税のためにリヒテンシュタインの国籍を手に入れようと思うと、最低九百万円出せばいい——などの売上げ、観光収入などで、国民の暮しは豊かで、所得税はわずか一・四パーセントしか払わないで済む……。

小国とは言え、王女は王女だ。晶夫は左手で油をつけてない髪を一撫ですると、三階でエレヴェーターから降りた。

三階の係りのボーイは、すでにイラから充分にチップをもらっているのか、サン・グラスを外した晶夫を見ると、器用にウインクして控室に引っこんだ。

三〇七号室の前に立った晶夫は深呼吸した。胸に抱えた赤や紫や黄色のフリージアの芳香が鼻をくすぐる。

イラにあずかったキーをドアの鍵孔に差しこんだ。鍵を外す。ドアを開いて足を踏み入れた。

そこは控えの間であった。後手にドアを閉じ、ノブのロック・ボタンを押した晶夫は、奥のドアを開いた。

ホテルと言うより、個人の家の居間のように落着いた部屋であつた。淡いライトが濃い影を投げ、テーブルの上には、氷のバケツにシャンペーンやウォッカの壺が突つてまけたものや、まだ切り分けてないロースト・チキンなどの大皿が並んでゐる。

そしてイラは、胸と腰をのぞけばまるつきり透けて見えるネグリジエをまとつて、ソファの上で膝を抱えてゐた。晶夫はイラの前に跪^{ひざまず}き、花束を差しだした。花束に顔を埋めたイラは、深く息を吸つた。

晶夫は勝手にシャンペーンの壺を開いた。よく冷えてゐるので吹きこぼれない。左手の指にはさんだ二つのグラスに注ぐと、ソファに腰を降ろし、その一つをイラに差しだす。

花束をポーカ・テーブルに置いたイラは、グラスを受取つた。二人は無言のまま、互いの瞳を見つめあつて、グラスを合わせる。視線をからませたまま、一気に飲み干す。

二杯目のグラスを合わすとき、晶夫は、
「僕を優勝させてくれた美しい女のために」

と、言つた。三杯目のときイラは、
「勇敢な虎のために」
と囁く。

三杯目を飲み干した晶夫は、グラスを肩ごしに背後に放つた。イラもグラスを捨てた。上着を脱ぎ、ネクタイを外した晶夫は、軽々とイラを引き寄せた。

二人の唇が合つた。背中から廻した左手で乳房をさぐり、右手をネグリジエの裾から這いあがらせながら、晶夫はイラの唇を軽く噛み、舌を深く使つた。それに激しく応えながら、イラは、晶夫のシャツの胸から手を差しこみ、凄まじい筋肉に爪をたてるようにした。

熱く濡れきつてゐるあたりに晶夫の右手がとどくと、指は吸いこまれそうになつた。

そのままの姿勢で、晶夫はイラを軽々と抱えて立上ると、寢室のドアを蹴り開ける……。

二時間後、乾いていく胸の汗を自覚しながらベッドに仰向けになつた晶夫は、くわえタバコにライターの火を移した。

横のイラは、腰のあたりをわずかにバス・タオルで覆

い、失神したようになって動かなかった。

向きを変えた晶夫は、再びイラに脚をからませ、鳶色とびいろの髪に煙を吹きこむ。髪のかなにこもった煙は幾つもの細い流れとなってゆっくり立ちのぼる。

イラの肌は象牙のように滑らかであった。晶夫は由紀子を想いだす。それに、イラは細い体なのに筋ばつてはいない。よく発達した乳房は、先端が左右にソップを向きあっていて可愛い。

三本目のタバコを晶夫が吸い終ったとき、イラは霞んだ瞳を開いた。今は瞳の色がスミレ色をしているだけでなく、そのまわりもかすかに紫色を帯びていた。

「まるで雲の上を漂っているみたい。みんながあなたに夢中になるわけがよく分ったわ——」

と、小娘のように恥ずかしげに微笑し、晶夫に身をすり寄せた。晶夫がもうたくましく甦よみがえっていることに気が付き、

「誰にも渡さないわ！ わたしの虎を！」

と、狂ったように再び迎える。

オランダGP

イラと晶夫がホテルの部屋を出たのは、翌々日の昼近くになってからだ。MVアグスタ・チームは、すでに次のレースが行われるオランダに発つていた。

王女の誇りをかなぐり捨て、イラはもう晶夫に溺れおほれていた。ダッチTT、つまりオランダGPについて行くと言ってきかない。

「ついてくるのは勝手だが、向うではレースが終るまで会うわけにはいかないよ」

晶夫は言った。さすがタフな晶夫も、いささかくたびれている。イラも目のまわりに隈くまを作っていた。

「いいの。たとえ、会えなくても。少しでもあなたの近くにいたい」

イラは、晶夫の分厚い胸に顔を埋めた。

二人は、マン島から古ばけたローカル航空機でリヴァプールに出ると、BOACのコメット四型機の特等席に

乗り替えてオランダに向った。

アムステルダム空港ホテルの駐車場には、晶夫がスウィスの陸送屋に運ばせてあったフェラーリ二五〇GTニプラス二が置いてあった。

晶夫はホテルのクラークにチップを与えてフェラーリを受取る。イラは車のそばに待たせてあった。

だが、そのホテルのロビーにも、ゴシップ専門のジャーナリストが大挙して待ちかまえていた。ロビーを出てフェラーリのドアを開き、助手席にイラを乗せようとする晶夫にカメラの放列を敷く。

質問を浴せかけてくる彼等に肩をすくめて見せ、晶夫はエンジンを掛けると、ドアをロックし、エンジンをレシニングさせてオイルに活を入れる。まだ水温計のゲージが動かないうちに、クラッチを滑らせて猛然と発車させた。

駐車場のアスファルトに黒々とタイヤのブラック・マークを残してフェラーリは跳びだす。轢かれそうになったカメラマンが、あわてて跳びのいた。

幾つもの運河を渡ってアムステルダムを抜けたフェラ

ーリは、ヨーロッパ・ロード十号線に出た。北海が真近だ。左手は四輪のGPレースが行われるツァンダヴォルトの砂丘だ。晶夫は右にコースを取る。風が強く、道路に砂が吹きつけられてタイヤは滑りやすかった。

海面より低いオランダの地形は、ひどく平坦であった。山など無い。いたるところに花畠がひろがっていた。

デンオエヴァーで堤防を兼ねた長い長い橋を渡る。堤防の内側には、アイセル湖が今にもあふれだしそうにひろがっていた。

ダッチTTレースの行われるヴァン・ドールンテ・サーキットは、アッセン市の近くにある。アッセンは、アイセル湖を横切ってから八十キロほどのところにあるグロニンゲン市で右折し、内陸に二十キロほど入ったあたりに位置していた。

アッセンのあたりは、まったくの平坦地であった。川は淀んで流れず、農家は色とりどりに塗られ、平野には牛や羊が放牧されている。

晶夫はイラを、市の中心部にあるホテル・リヴァティ

に送りこんだ。今夜も一緒にいてくれ、とせがむイラを振り切り、MVチームの宿舎である郊外のホテル・マリアンヌにフェラーリを向ける。

すれちがうオランダ娘は、赤みがかった金髪の大柄なグラマーが多かった。ショート・パンツから剃きだしにした真っ白な太股を夕陽に金色に染め、自転車にまたがって走っている。

運河に面したホテル・マリアンヌに着いた。ホテルとは言っても、下宿屋のような構えだ。チーム・メイトのサートイズたちがロビーでチェスをやっていた。苦笑いして晶夫を迎える。

レーシング・マネージャのネロ・パガーニは苦笑いでは済まなかった。晶夫に殴られた恨みもあって、「恥を知れ！ 遅れてきたりして。それでもプロか？」と、晶夫を怒鳴りつける。

「女が激しくて」

晶夫はニヤリと笑った。

宿の女主人のマリアンヌに二階の部屋に案内された。粗末な部屋だ。それでも、シャワー・ルームがついてい

た。メカニックに預かってもらってあったマン島TTレースのレブリカが棚に飾られていた。

シャワーを浴び、パンツ一枚でベッドに転がると、たちまち晶夫は眠りに落ちた。しかし、すぐに夕食の仕度が出来た、という事で起きた。

ネクタイをつけて食堂に降りると、近くのガレージを借りてマシーンの整備をしていたメカニックたちも集っていた。晶夫に冷い目を向ける。

ホテルの泊客はMVチームが大半であった。食事は、ソーセージと野菜のゴツタ煮とアヒルのアンズ煮、それに夏ミカンのような大きな玉のイーダム・チーズや平べったい丸型のゴード・チーズが食い放題だ。そいつを、オランダ・ジンのソーダ割りで胃におさめる。

食事が終ると、パガーニが晶夫に言った。

「話がある。私の部屋に来てくれ」

パガーニの部屋は、晶夫の部屋と三部屋離れていた。

晶夫はソファで高々と脚を組み、ロビーの売店で買った葉巻に火をつけた。

パガーニは、齒が欠けた口を開いた。

「チームの統制を乱すようなことは、やめてくれ。当分のあいだ、君に外出を禁じる。レース場への往復以外は……」

「分りましたよ」

晶夫は葉巻の煙をパガーニに吹っつけた。

「それから、今度のレースだが、君はかねてからの予定通りに引っぱり役にまわってもらおう。ウッピアリとフライング・ジョンを勝たせるためにな」

パガーニは顔をしかめながら言った。

「契約通りにですか？」

「そうだ。契約は何物にも優先する」

「仕方ないですな」

「もし、王女にカッコいいところを見せようとして、君が最後まで逃げ切つて優勝したりしたら、今後いっさい君をレースに出場させない」

「飼ひ殺しにする、というわけですか？」

「そうだ。クビにはしない。クビにしてホンダにでも移られたら面倒だからな」

パガーニは、サディスティックな笑いを浮かべた。

自分の部屋に戻つた晶夫は、しばらくのあいだ葉巻をグシャグシャに噛んで宙を睨みつけていたが、葉巻を吐き捨ててベッドにもぐりこむ。やがて全身に深い疲れを覚えて眠りこんだ。

翌朝目を覚ましたときは、まだ疲れが少し残っていたが、朝食前のランニングを終えたときには、体の調子は回復していた。朝食後、チームのマイクロ・バスに乗りこんで、ヴァン・ドールンテ・サーキットに向う。車内で晶夫は、すでに数百回、目を通したコースの公図に、さらに目を通す。

五分もたたないうちにサーキットに着いた。すでに、他のチームのレーサーが爆音高く走りまわっている。

コースは右廻りだ。全長は七・七〇四キロ。路面にアップ・ダウンが出ないかわりに三十一ものカーヴがある。一部には公道が取入れられているとは言え、鉈なたの形を複雑にしたような、そのコースの路面状態は良好で、スタンドも完備している。コース幅も広い。しかし、数多いカーヴのせいで、ラップ・スピードは高くない。